

名家に支えられる京劇と伝統芸能

— 台湾 —

池上 寛

日本を含め、民間企業が文化事業に対して何らかの支援を行っていることは多い。台湾でも同様で、例えば台湾を代表するいくつかの

企業はオーケストラを自前で運営したり、博物館を経営することで文化事業に貢献している。このような形で貢献だけでなく、台湾を代表するある名家では、伝統的なエンターテインメントである京劇や伝統芸能に金銭面からサポートするだけでなく、劇場を整備し、そこで一般の人々に観てもらおうと京劇や台湾の伝統文化を紹介する。筆者は二〇一一年にプライベートで台湾に行った際に、京劇と伝統芸能を紹介する劇場である臺北戯棚に初めて足を踏み入れた。ここでの京劇や伝統芸能の紹介は、今まで見たことがないほど独特のものであった。本稿ではこの劇場について取り上げ、この劇場を運営する家族やどのような背

景で生まれたのか、そして実際に劇場に足を運んで感じたことなどを記したい。

●臺北戯棚の運営家族

臺北戯棚（タイペイ・アイ）は、もともと有名な民間劇場のひとつである。その理由としては、この劇場を所有しているのが辜一族であるためである。この辜一族とは和信グループという企業グループの所有家族としてつとに有名であり、台湾の名家としても有名である。事実、二〇一一年秋から二〇一二年六月にかけて「百年風華—台湾五大家族特展」が国史館など三方所で巡回する形で開催された。この展覧会には中華民国建国百年記念行事の一環として開催され、辜一族も五大家族のひとつとして取りあげられたのである。辜一族は日本統治時代からの名家であり、今なお台湾を代表する名家のひとつといえる。この名家が運

営しているために、この劇場は有名であり、しかも現在では和信グループの中核企業のひとつである台湾セメント本社の三階に劇場が設けられている。

辜一族のなかで、もともと京劇などの演劇に造詣が深かったのは、辜振甫氏（一九一七〜二〇〇五）である。辜振甫氏は台湾セメントのトップとしてだけではなく、晩年には財団法人海峡交流基金会の初代理事長に就任して、中国側の中台交渉機関である海峡兩岸関係協会の汪道涵会長とシンガポールで初のトップ会談をした人である。まさしく、財界を代表する人物であった。辜振甫氏は芝居そのものが好きだけでなく、とくに京劇が好きで自ら出演することもあったという。京劇に出演する際には、三国志の諸葛孔明を好んで演じていた（参考文献①…一〇九ページ）。確かに、臺北戯棚のロビーの壁には諸葛孔明に扮

した辜振甫氏の写真が飾られていたことから、かなり好きだったのではないかと考えられる。

辜振甫氏がこのように文化事業へ協力した背景には、父である辜顯榮氏の存在も大きかったに違いない。日本統治時代に活躍した辜顯榮氏は企業家としての一面だけではなく、多くの社会貢献、とくに文教事業に力を注いだ。たとえば、台中中学校などの学校や図書館の建設費用、台北にある龍山寺などの寺院の建設費用などに多額の寄付をし、社会貢献をしていたのである（参考文献①…三四―三五ページ）。また、臺北戯棚のウェブサイトをみると、辜顯榮氏は一九一五年に大稲埕にあった淡水戲館という劇場を日本人から手に入れ、それを改築して「台湾新舞台」と改名して再開したという。その舞台には上海から京劇団体を招聘し、福建と地元の演劇団体と一緒に共演させたという。しかし、太平洋戦争の間に、「台湾新舞台」はアメリカ軍の空襲によって無くなったという。

父である辜顯榮氏のこのエピソードから考えると、辜振甫氏の京劇などの芝居好きは案外父からの影響かもしれない。

辜振甫氏は京劇などの文化事業推進のために、当時アメリカに在住していた京劇俳優の李宝春氏と

ともに一九八九年に財団を設立した。また、李宝春氏は京劇団体である「台北新劇団」を創設し、台湾に京劇を根付かせようとしたのである。辜振甫氏はこの団体に対しても多くの協力を行うとともに、一九九七年には台北に民間劇場である「新舞台」を再建させたのである。この劇場では中国からの伝統芸能の招聘だけではなく、台湾の伝統芸能の紹介という意味でも大きな成果をあげたのである。このことは、台湾と中国の文化交流にも大きな貢献をしたといえる。

その後、二〇〇二年に台湾セメントの本社ビルが落成されるに合わせ、本社ビル内に臺北戲棚を設け、現在でも毎週末に京劇や台湾の伝統芸能を紹介しているのである。

●劇場に足を踏み入れる

二〇一一年五月に初めて、筆者は臺北戲棚に行った。予約が必要とのことであつたので、午前中にホテルから歩いて台湾セメントビルに行き、受付で予約を入れてから



1

出かけた。夜八時からの公演なので、七時半ごろにチケットを受け取り、エレベーターで会場に入る。お土産コーナーでも見るかと思っていたところ、人だかりができていた。みると、京劇俳優による化粧が始まっていたのである（写真1）。

このような光景を見ることは想像していなかったため、正直びっくりした。また、写真も撮って良いということ、多くの観客（日本人だけではなく、欧米人も結構いた）が写真を撮っていた。

八時から公演が始まった。前半は廷威獅子舞劇団による獅子舞であった。日本の獅子舞とは違い、かなりアクロバティックな動きをしていた。ここでも、フラッシュを使わなければ、写真撮影をしてもよいということであつたので何枚か記念として残した（写真2）。また、途中には日本でいうお多福のような格好をした俳優が客と一緒にダンスをしたりし、全く飽きさせることはなかった。

その後、休憩が入った。ロビーでは胡弓などの中国楽器の音色に



2

合わせて主演俳優による踊りが行われていた（写真3）。これから京劇に出演するというのに、その直前の休憩に踊りを披露するとは思わなかった。このような観客に対するサービスにびっくりした。

休憩後には、いよいよ台北新劇団による京劇が始まった。両サイドには日本語、中国語、英語による字幕が流れ、中国語がわからなくても、理解ができるように配慮されていた。この時鑑賞したのは、「白蛇伝」であつた。この話自体は中国を代表する民間説話のひとつである。鑑賞しながら、小さい時に映画か何かで見た記憶がよみがえった。この原稿のために改めて調べると、日本で初めて製作された総天然色長編アニメ映画とのことであつた（一九五八年公開）。公開された年にはまだ生まれていないので、テレビでおそらく見たのであろう。非常に話もわかりやすく、京劇らしい趣向もあり、楽しんでみる事ができた。

全部を通して演じたら何時間に



3

もわたる劇であるかもしれないが、鑑賞時間は四〇分ほどで、非常にコンパクトにまと

まっていた。ここでも写真撮影が出来たので、舞台写真を数枚撮影した（写真4）。

終了後には、先ほどまで演じていた京劇俳優や獅子舞をしていた演者たちがロビーに出てきて、観客を見送った。たまに歌舞伎などの演劇を見に行くが、小劇場でもない限り、日本でこうした光景にはまず出会わない。劇場は決して大きなものではないが、俳優と観客を近づけることがこの劇場の大きな目的の一つに感じられた。また、辜氏の協力があつたからこそ、今まで見たことのない劇場運営になつていくような気がした。



4

（いけがみ ひろし／アジア経済研究所企業・産業研究グループ）

《参考文献》

① 林文龍編著（二〇一一）『鹿港辜家』 國史館臺灣文獻館。

② 臺北戲棚ウェブサイト (<http://www.taipeiye.com>)。